第３節　亀山構内の立会調査

教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う立会調査

調査地区　亀山構内

調査期間　平成２年11月13日～12月29日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約130m²

調査結果　同構内における汚水排水管布設に伴う発掘調査の成果は第２章で述べた。今回の立会調査では、昭和61年度の試掘調査の結果[1]を受けて、埋蔵文化財の分布が希薄と予想され、試掘調査を実施しなかった工事路線で若干の遺物を、また、前回試掘調査を行えなかった北側のプール部分で包含層から多くの遺物が出土した。遺構はいずれも検出していない。工事に伴い順次、ＡからＥ路線の立会調査を行った。

Ａ路線は校舎の周囲を西側から北側を通り中庭に至る路線で、工事掘削面まで攪乱層と埋め土層だけであった。遺構は近代の廃棄された井戸が校舎北側にあったのみで、遺物は中庭の西寄りの校舎基礎近くで弥生土器の高坏と若干の土師器片が出土した。

Ｂ路線は、第２章で述べたＡ～Ｃ調査区とほぼ重なるもので、新たに遺構は検出しなかった。北側は基本層序が厚さ６cmのコンクリート、厚さ約35cmの埋め土、厚さ約10～20cmの黒褐色粘質土（第２章の第５層･第６層に対応）、灰色砂層で、黒褐色粘質土から弥生土器と土師器の甕、高坏が出土した。校舎南側は、すべて埋め土の範囲内で、中世の土師器の皿と近世の磁器が出土した。

Ｄ･Ｅ路線は、他の調査区から約１m高い段上に位置するプールの管理棟周囲である。基本層序は上から厚さ25cmの表土・埋め土、中世の遺物を包含すると思われる厚さ10cmの黄灰色砂質土、弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物を包含する厚さ35cmの黒褐色粘質土、砂礫層の５層に分かれる。黒褐色粘質土の包含層は残りがよく、弥生土器、土師器が多く出土し、器形では高坏や台付鉢、椀などの供膳形態を示すものが比較的

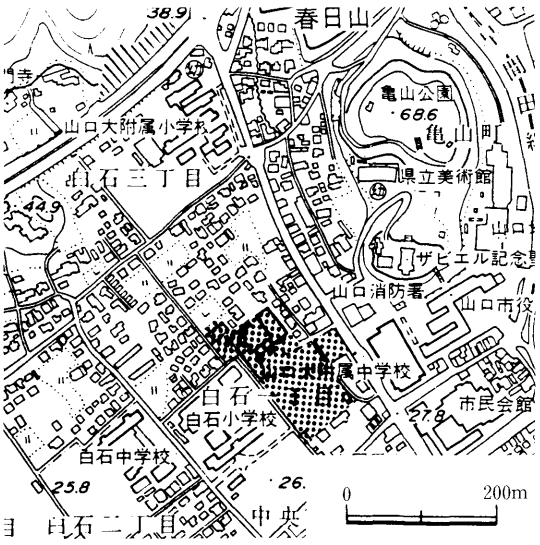


Fig.48　調査区位置図（１）

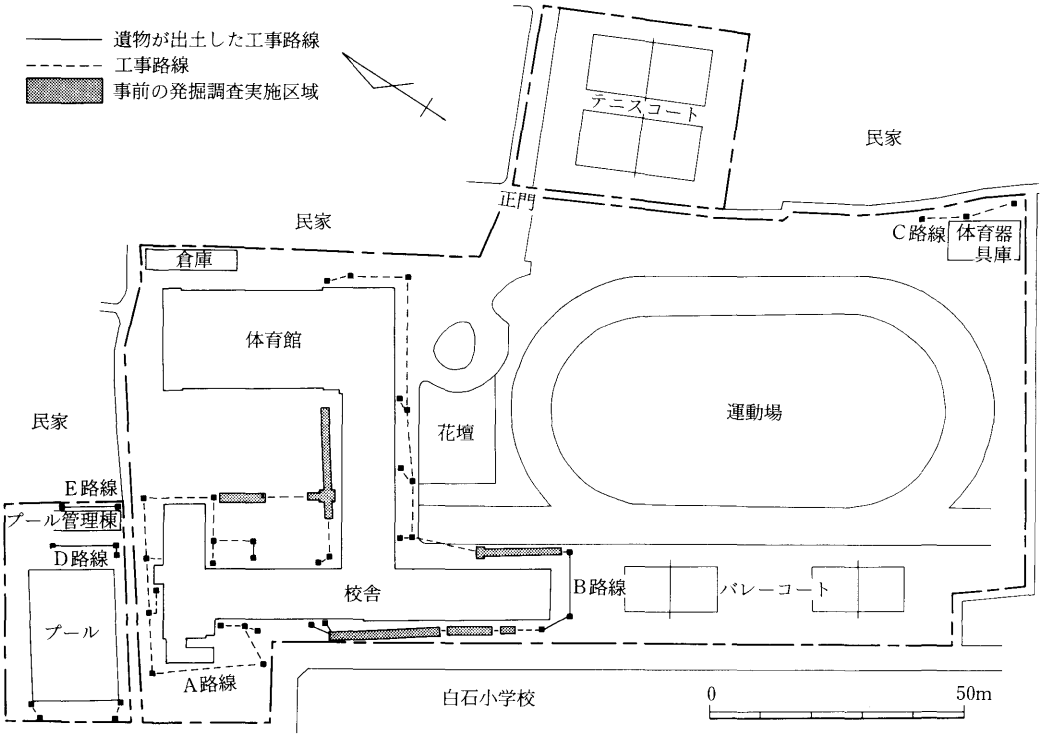


Fig.49　調査区位置図（２）

多い。また、第２章の調査も含め、附属山口中学校敷地では初めて須恵器が出土した。D・E路線のあるプール管理棟周辺の現標高は、学外の北側の畑地とほぼ等しく、ここでも土師器を表面採集することができた。

出土遺物

A路線（Fig.50－1･2，PL.31・33）

１・２は中庭の校舎寄りで出土した弥生土器の高坏。接合はしないが、同一個体と思われる。１は坏部で、体部は屈曲点で接合して成形する。屈曲点から上は外反しながら外傾し、端部は角ばり外側に面をもつ。内外面とも風化のため調整不明。２は脚部。上部は円筒形で裾部のみ広がる。３方に焼成前の穿孔がなされるが、粘土が少し固くなってから施され、内面がささくれだっている。外面は縦に調整痕が残るが、ミガキかヘラナデか摩滅のため判断できない。他に、瓦質土器、土師質土器各１点が出土した。

B路線（Fig.50－3～12,PL.31・33）

３～10は路線の北端で出土し、３・５～７は黒褐色粘質土から出土した。３は土師器の

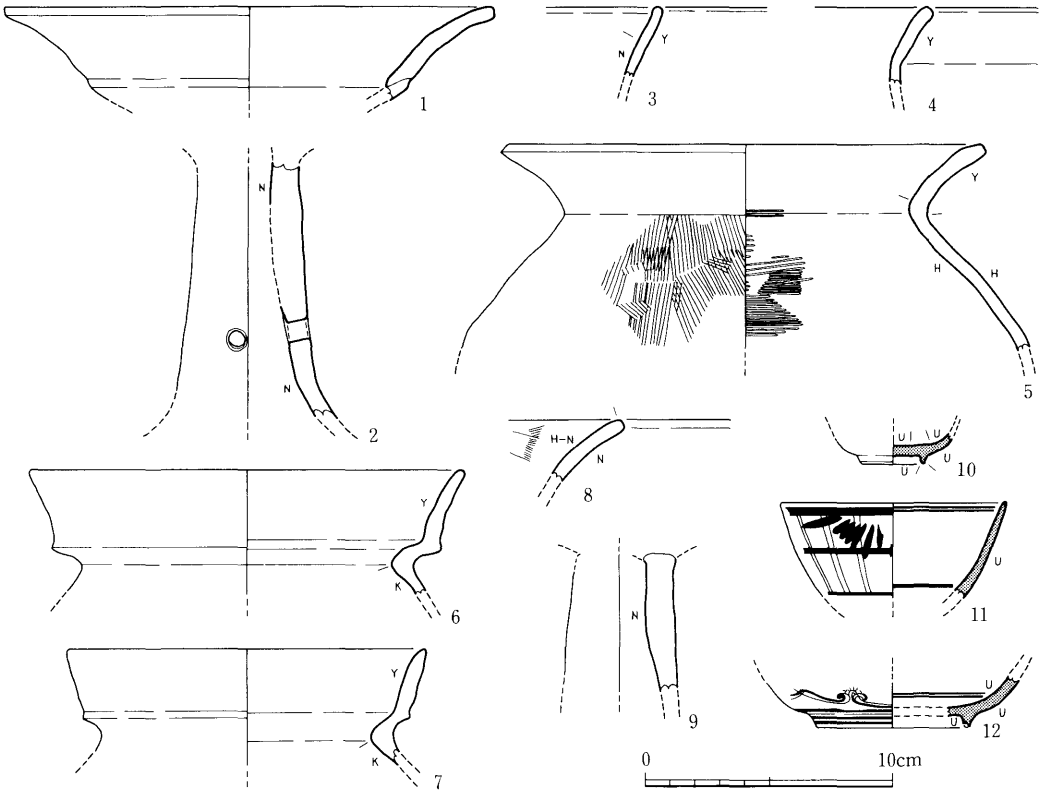


Fig.50　出土遺物実測図（1）

小形丸底壺。器壁が薄い。端部は内側が玉縁状にやや肥厚し、斜め外方に面をもつ。4・5は土師器の甕。頸部ははっきりとした稜をもたず、胴から口縁へゆるいカーブを描く。端部はやや厚く、斜め上方に面をもつ。5の器面調整は、外面に不定方向の刷毛が、内面にやや幅広の刷毛が施される。6・7は山陰系の土師器の複合口縁の甕。器壁がやや厚く、頸部の上の稜は丸く明瞭ではない。8・9は土師器の高坏。8は坏口縁部。ゆるく外反しながら外傾し、端部は外側に面をもつ。9は円筒形を呈する脚上半部。上端は、坏接合のための擬口縁をなすが、接合方法は不明。内面に成形時のシボリ痕が残る。10は近世磁器のぐいのみ。高台は削り出し、体部はゆるく内弯して立ち上がる。内面は釉の掻き取りで蛇の目を作るが、中心から釉が流れている部分がある。畳付も釉を掻き取る。

11・12は校舎南端より出土した。ともに国産の近世磁器の染付の碗。11はやや径が小さく深い。内面の文様は上部に2条の圏線、見込み付近に1条の圏線がみられる。外面は縦横の線に半裁された花弁を描き、垣根と菊花とを意匠していると思われる。

他の出土遺物には、中世土師器の皿の細片がある。

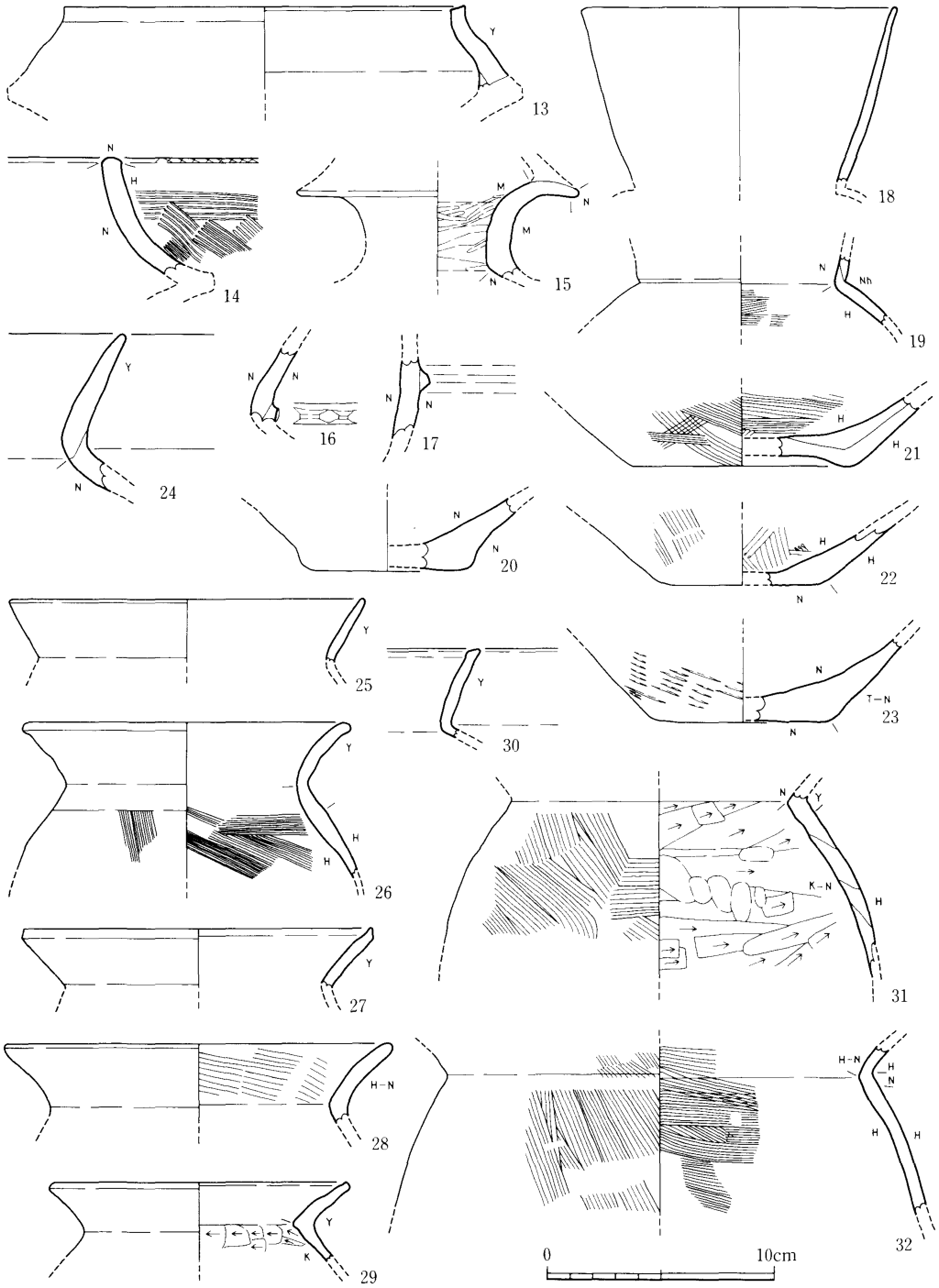


Fig.51　出土遺物実測図（２）

D路線（Fig.51・52－33～48・52・53，PL.31～33）

13～15は、弥生土器の壺。いずれも複合口縁で、上段部は大きく内傾する。13は、上段部の口縁の継ぎ目が擬口縁をなし、内面は下段部の粘土の貼付け痕が残る。口縁はまず内弯して内傾し、上部は外反しながら直立する。端部は内下がりの段をもつ。14は上段部が外反しながら内傾する。端部はカマボコ形に角張り、ヘラ描きの斜格子文を施す。外面に化粧土を塗ったと思われる。15は下段部の口縁が残存し、きついカーブで外反する。上段部との接合面は擬口縁となる。内外面とも丁寧なミガキが施され、特に外面は細かく単位がつかめない。16・17は弥生土器の壺。16は頸部の屈曲点に浅い刻み目をもつ突帯が貼り付ける。17は胴部に２～３条の突帯が巡る壺と思われる。突帯の上面は平坦。18は弥生土器の直口壺。器壁は薄く、口縁は直線的に伸びる。口縁端部はやや角張る。内外面とも風化のため調整不明。19は土師器の壺もしくは甕。胎土や調整は小形丸底壺に似るが、径が大きすぎ不適当と思われる。器壁は薄く、胎土はよくしまっている。頸部外面には、粘土帯接合のための段差が明瞭にあらわれる。20～22は弥生土器の壺の底部。20はわずかに上げ底となり、底部から胴部への変換点がやや高いところにある。21も上げ底気味。底部は２枚の粘土板を貼り合わせて成形されたと思われる。内面の刷毛は目が細かく、皮状のものでナデた痕跡かもしれない。外底面にも刷毛を施す。22は内面の刷毛の目の幅が広い。内外面に化粧土を塗ったと思われる。23は庄内系。タタキはやや細めで、右下がり。在地産と思われる。

24～26は弥生土器の甕。24は口縁がやや長く、直立する。端部はやや尖る。頸部で粘土帯を接合する。25は器壁が薄い。口縁は直線的に伸び、端部はやや丸く斜め上方に面をもつ。26は頸部に明瞭な稜をもたず、胴から口縁へゆるくカーブを描く。端部はやや肥厚し、先端をわずかに外側につまみ出す。27～32は土師器の甕。27は口縁が直線的に伸び、端部をつまみ出し上方に引き上げる。28は器壁がやや厚く、端部は丸い。口縁内面に刷毛目が残る。29は口縁が直線的に伸び、端部はやや角張り、斜め上方に面をもつ。頸部は内側に肥厚する。胴部内面は短い単位のケズリが施される。30は口縁がやや長い。端部は肥厚し、外側につまみ出され、面取りされる。ヘラによる成形の可能性も考えられる。外面に煤が付着している。32は胴部の粘土帯の接合痕が明瞭に残る。焼成はきわめて良く、堅く焼きしまり、表面は黒色を呈し炭素を吸着させたように平滑になっている。胴部外面のナデは、皮状の素材によると考えられ、目がそろわない。胴部内面は、ケズリの後、部分的に下から上へナデを施す。頸部外面は強い横ナデによって刷毛目が消失している。

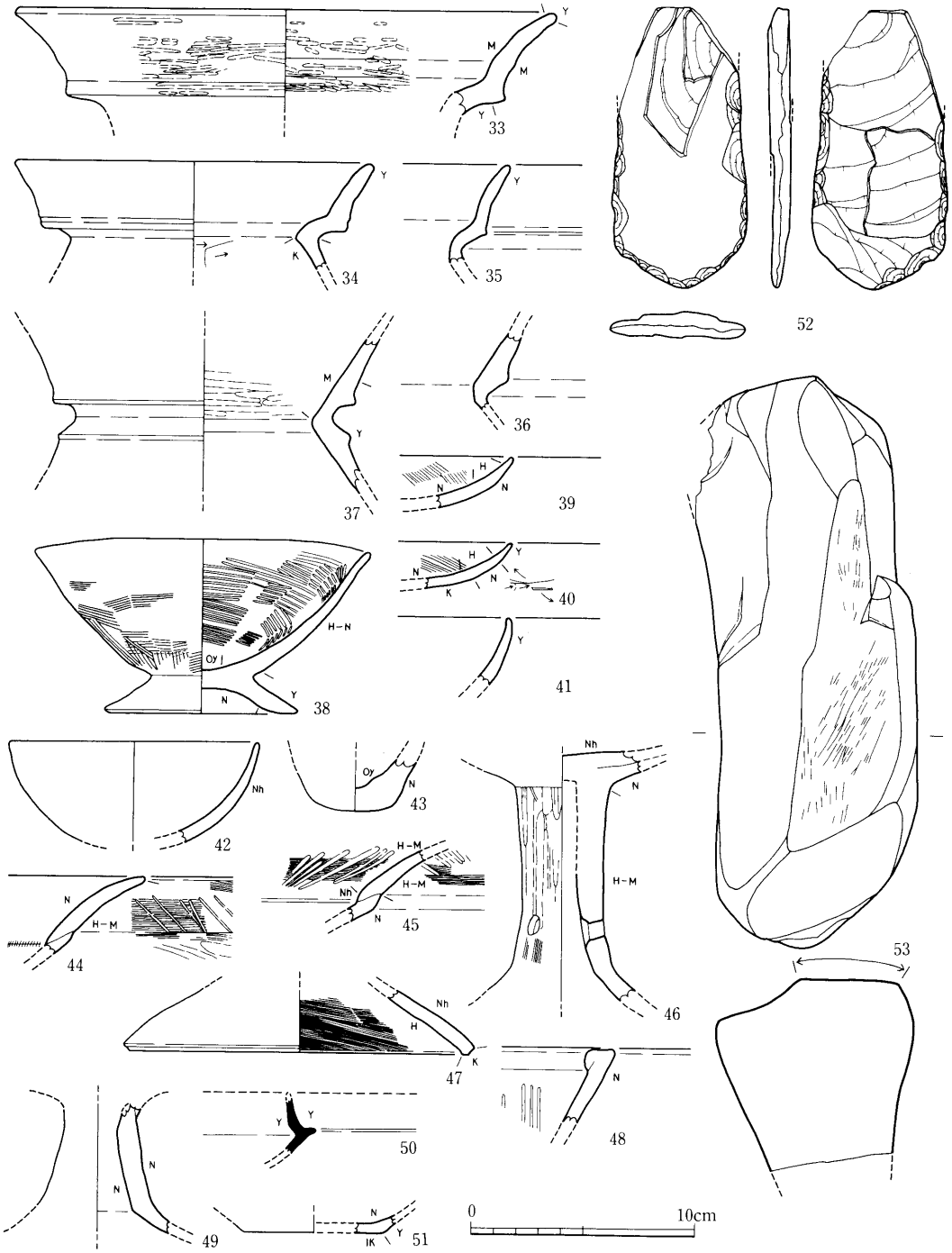


Fig.52　出土遺物実測図（３）

33は、畿内系の２重口縁の土師器の壺。器壁が厚くしっかりしたつくりである。端部は丸い。内外面にやや深さはあるものの幅が狭く短いミガキが施される。内面に部分的に褐色の物質が付着しているが、成分は不明。34～36は山陰系の土師器の複合口縁の甕。34は頸部上の稜が丸くはっきりせず、稜の更に上には、浅い沈線が巡る。端部は斜め上方に面をもつ。外面全面に煤が付着し、特に胴部は厚く付着している。35は頸部上の稜を鋭くつまみ出し、端部もやや角張る。36は風化が著しくはっきりしないが、いずれの稜ももともと丸みを帯びていたと考えられる。37は山陰系の鼓形器台。くびれの上下の稜はかなり強くつまみ出すが、幅が広く鋭さはない。くびれ部の復原径は11.4cm。

38は土師器の台付鉢。鉢の半分を欠損する。脚台部は直線的に伸び、端部はわずかに反り尖る。体部はゆるく内弯して伸び、端部は丸い。口縁はかなりゆがむ。体部内面の刷毛目はやや幅が広く１単位が６本で、比較的強く施されナデの後もはっきりと痕跡が認められる。39～42は弥生土器もしくは土師器の鉢。39・40はゆるく内弯し、端部はやや尖る。ごく浅い径の小形の椀と思われる。41は39・40に比べると体部の立ち上がりが急で深めの鉢と思われる。42は台付椀の可能性が高い。ゆるく内弯しながら立ち上がり、端部はやや尖る。43は手捏のミニチュアの甕と思われる。外面は平底を呈するが、内面は狭く、中央のみ小さくくぼむ。胎土は悪く直径７㎜くらいの小石も含む。

44～47は弥生土器の高坏。44は坏上部が残存。屈曲点では粘土帯を接合し、内面は粘土の継ぎ目を刷毛の工具で押さえる。外面の刷毛は１単位が８本確認できる。外面は焼成時にいぶしたようにやや黒くなる。45は坏の屈曲点付近で粘土を接合し、内面はヘラで押さえる。仕上げは丁寧。46は脚上部で、ほぼ円筒形。裾部が急に広がる器形であろう。上下２段の３方に焼成前に穿孔が外側からなされる。下の穿孔は、上の穿孔に対し約20°左に振る。脚と坏の接合は、脚の上部を円盤状に充塡し、更に下部を補強すると考えられる。47はわずかに内弯する脚裾部。端部は内側につまみ出した後、ケズリで面を取り、内端面が接地する。

48は瓦質土器の擂鉢。口縁端部は肥厚し、内側に折り返す。上面はややくぼむ。カキ目は３本以上。

52は結晶片岩製の粗製扁平打製石斧。頭部を欠損する。背面の大半は節理面に沿って剝落するが、調整加工は残存する。調整加工は縁片に沿って１枚の剝離面によって構成されている。腹面下端部の大きな剝離面は、使用時における剝離面と思われる。53は１面の研砥面を有する砥石で、裏面は欠損する。石の目は密で、仕上げ用の砥石と考えられる。研

砥方向は、ほぼ長軸に沿う痕跡が両端にあり、中央は長軸に対し約30°斜めの痕跡が残る。

Ｅ路線（Fig.52－49～51，PL.32・33）

49は土師器の高坏。脚中央に屈曲点をもち、裾部が広く開く。脚上部は円筒形でおわり、坏の接合は、円盤充填と下方からの貼り付けの２方法を併用すると思われる。

50は附属山口中学校敷地で初めて出土した須恵器の坏身。かえりはやや長く、受け部はほぼ水平に開く。

51は、中世土師器の皿。底部は回転糸切りを行う。内面の底部から体部への立ち上がりは明瞭ではない。

小結

今回は立会調査であり、土層の確認と遺物の採集しかできなかった。その中で、プール管理棟周囲のＤ・Ｅ路線では試掘調査が不可能だったこともあって、予想外に多くの遺物が出土した。出土遺物については事前調査を行った第２章の小結にまとめて記述した。プール管理棟周辺のＥ・Ｄ路線の黒褐色粘質土から出土する弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器は、高坏、台付鉢、椀、器台などの供膳形態を示すものが比較的多いことから、祭祀的性格をもった遺構からの流れ込みも考えられる。また、その上層の黄褐色砂質土層から室町時代に属すると考えられる遺物も出土し、２時期にわたる流れ込みが確認できた。

調査地周辺の地形は、学外の北側の畑地からプール付近にかけては、標高約29.4mの舌状台地上に位置し、校舎のある面の北側の地域は、この台地を削り標高約28.3mに造成されている。その結果１m以上の段差がつき、包含層は完全に削平されている。Ｂ路線の部分まで南下すると舌状台地の先端にあたることから削平が少なく、包含層が残存していると考えられる。学外の地域を含めたプール付近の高位の段上での工事の際は細心の注意が必要といえよう。

〔注〕

１）山口大学埋蔵文化財資料館「亀山構内教育学部山口附属学校汚水配水管布設に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』1989年）

Tab. 4　出土遺物観察表

法量（　）は復原値

番号	器　種	法　量 (cm) (①口径②底径③器高)	色　調 (①外面　②内面)	胎　土	焼　成	備　考
A路線						
1	弥生土器　高坏	①(19.4)	橙色(5YR7/8)	良　好	良　好	
2	弥生土器　高坏		橙色(5YR7/6)	良　好	良　好	1と同一固体?
B路線						
3	土師器　小型丸底壺		灰白色(10YR8/2)	良　好	良　好	
4	土師器　甕		橙色(5YR7/8)	やや不良	良　好	
5	土師器　甕	①(19.0)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	やや不良	やや不良	
6	土師器　甕	①(17.4)	浅黄橙色(10YR8/3)	やや不良	良　好	山陰系
7	土師器　甕	①(14.2)	①浅黄橙色(7.5YR8/4) ②浅黄橙色(7.5YR8/6)	やや不良	やや不良	山陰系
8	土師器　高坏		①橙色(2.5YR7/8) ②橙色(2.5YR7/6)	良　好	良　好	
9	土師器　高坏		淡橙色(5YR8/4)	やや不良	良　好	
10	磁器　ぐいのみ	②(2.4)	素地－灰白色 釉－白色	精　良	堅　緻	
11	磁器　染付　碗	①(9.0)	素地－白色 釉－淡青色	精　良	堅　緻	
12	磁器　染付　碗	②(6.1)	素地－白色 釉－淡青色	精　良	堅　緻	
D路線						
13	弥生土器　壺	①(17.6)	橙色(5YR7/8)	不　良	やや不良	
14	弥生土器　壺		①浅黄橙色(7.5YR8/4) ②浅黄橙色(7.5YR8/3)	やや不良	良　好	
15	弥生土器　壺		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	良　好	
16	弥生土器　壺		にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや不良	良　好	
17	弥生土器　壺		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②褐灰色(10YR6/1)	やや不良	やや不良	
18	弥生土器　直口壺	①(13.8)	橙色(5YR7/8)	良　好	良　好	
19	土師器　壺or甕		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②灰黄褐色(10YR6/2)	良　好	良　好	
20	弥生土器　壺	②(6.6)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	良　好	良　好	
21	弥生土器　壺	②(9.5)	①灰褐色(7.5YR6/2) ②にぶい黄橙色(10YR6/2)	良　好	良　好	
22	弥生土器　壺	②(6.0)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	やや不良	良　好	
23	土師器　壺	②(7.6)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②灰黄褐色(10YR5/2)	やや不良	良　好	庄内系
24	弥生土器　甕		浅黄橙色(7.5YR8/4)	良　好	良　好	
25	弥生土器　甕	①(15.4)	①浅黄橙色(7.5YR8/4) ②橙色(5YR7/5)	やや不良	良　好	
26	弥生土器　甕	①(13.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	良　好	良　好	
27	土師器　甕	①(15.2)	①にぶい橙色(2.5YR6/3) ②淡赤橙色(2.5YR7/3)	良　好	良　好	
28	土師器　甕	①(16.8)	①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②にぶい橙色(5YR7/4)	良　好	良　好	
29	土師器　甕	①(12.8)	浅黄橙色(10YR8/3)	やや不良	良　好	
30	土師器　甕		①黒褐色(7.5YR3/1) ②浅黄橙色(10YR8/4)	良　好	良　好	
31	土師器　甕		①黒色(10YR2/1) ②灰黄褐色(10YR6/2)	不　良	良　好	
32	土師器　甕		①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②明褐灰色(7.5YR7/2)	やや不良	良　好	畿内系
33	土師器　壺	①(23.6)	①橙色(7.5YR7/6) ②黒色(7.5YR2/1)	良　好	良　好	山陰系？
34	土師器　甕	①(15.6)	①褐色(7.5YR3/1) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	良　好	良　好	山陰系
35	土師器　甕		浅黄橙色(7.5YR8/3)	良　好	良　好	山陰系

平成２年度山口大学構内の立会調査

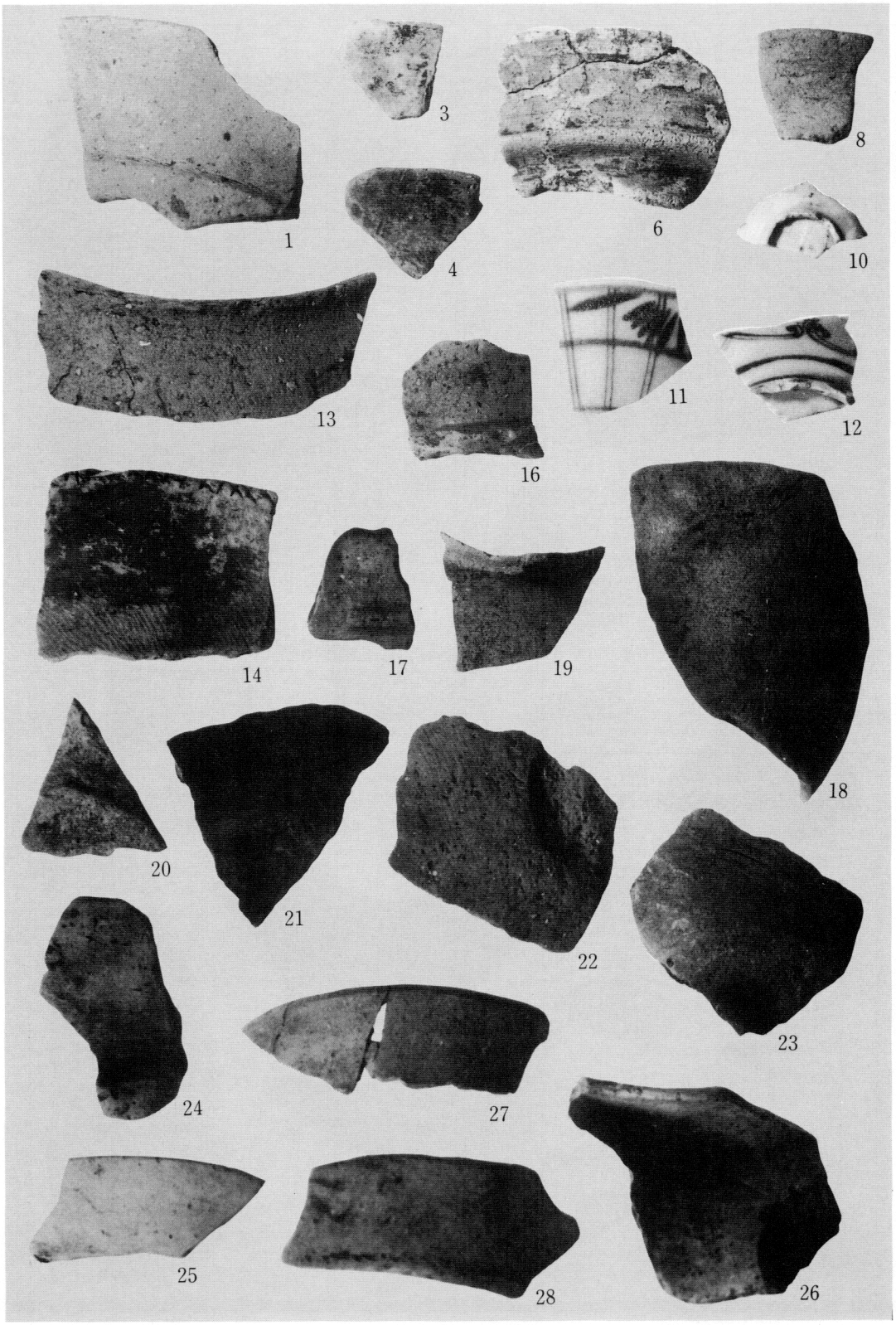
法量（　）は復原値

番号	器　種	法　量（cm） (①口径②底径③器高)	色　調 (①外面　②内面)	胎　土	焼　成	備　考
36	土師器　甕		淡黄橙色(7.5YR8/3)	不　良	やや不良	山陰系
37	土師器　鼓形器台		①淡橙色(5YR8/3) ②にぶい橙色(5YR7/3)	やや不良	やや不良	山陰系
38	土師器　台付鉢	①(14.8)　②(8.7) ③(7.75)	にぶい橙色(5YR7/4)	良　好	良　好	
39	弥生土器　鉢		①淡橙色(5YR8/3) ②淡赤橙色(2.5YR7/4)	精　良	良　好	
40	土師器　鉢		にぶい黄橙色(10YR7/2)	やや不良	良　好	
41	土師器　鉢		淡黄橙色(10YR8/3)	良　好	良　好	
42	弥生土器　鉢	①(11.0)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	良　好	良　好	
43	手捏土器　甕	②3.2	浅黄橙色(10YR8/3)	不　良	良　好	
44	弥生土器　高坏		①灰色(5Y4/1) ②にぶい赤褐色(5YR5/3)	精　良	良　好	
45	弥生土器　高坏		にぶい橙色(5YR6/4)	良　好	良　好	
46	弥生土器　高坏		淡赤褐色(2.5YR7/4)	良　好	良　好	
47	弥生土器　高坏	②(14.5)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	精　良	良　好	
48	瓦質土器　擂鉢		灰色(10Y4/1)	良　好	良　好	
E路線						
49	土師器　高坏		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良　好	良　好	
50	須恵器　坏身		青灰色(5B5/1)	良　好	堅　緻	
51	土師器　皿	②(6.2)	灰白色(10YR8/2)	精　良	良　好	

法量（　）は現存値

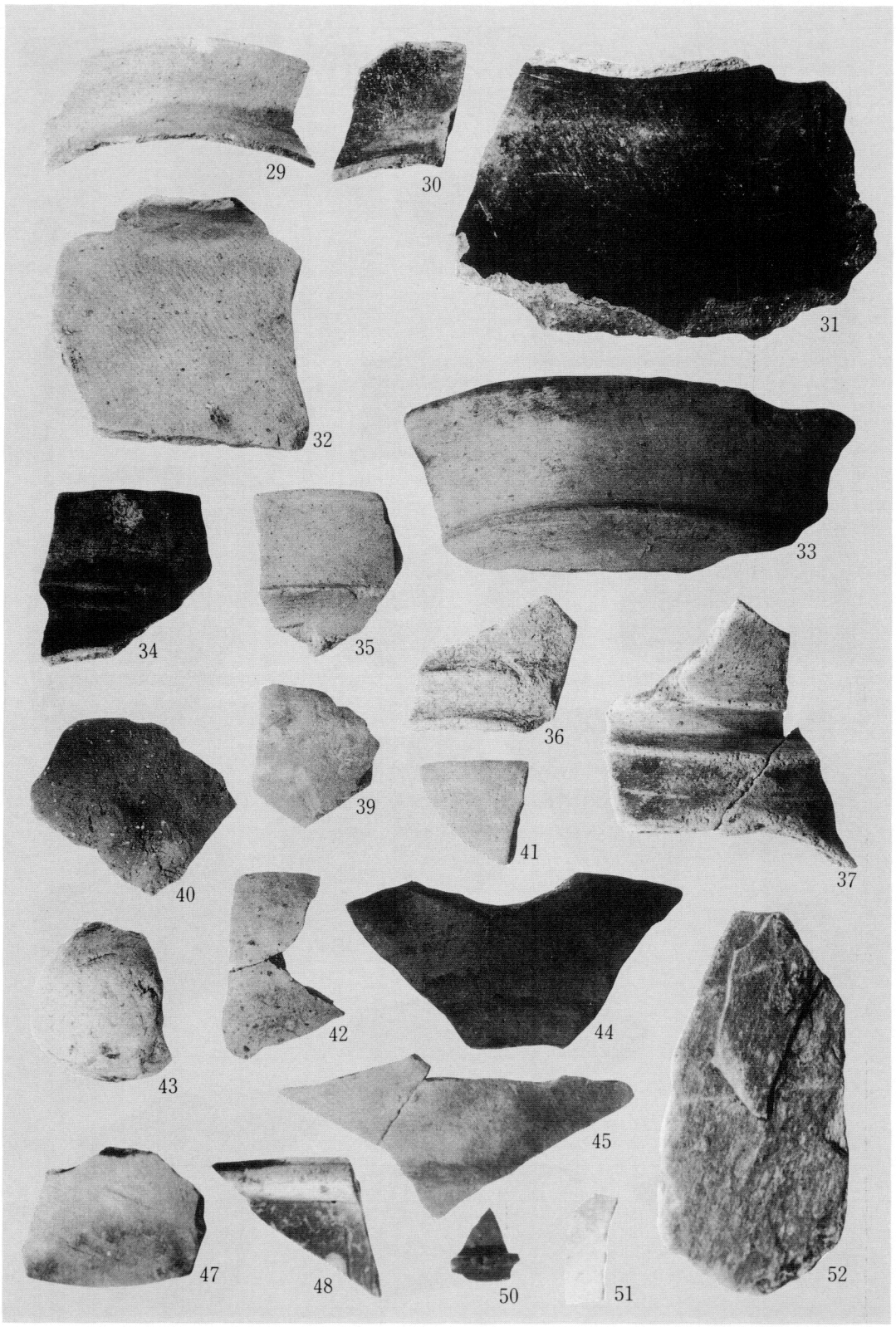
番号	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石　質	備　考
D路線							
52	粗製扁平打製石斧	(123.5)	(60.5)	(11.0)	141.15	結晶片岩	
53	砥　石	254	99.5	(85)	1132.25	硅長石	

立会調査出土遺物 (1)



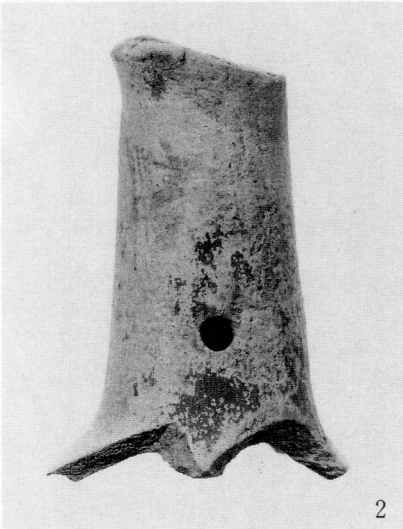
亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う立会調査出土遺物 (1)　　約1：2

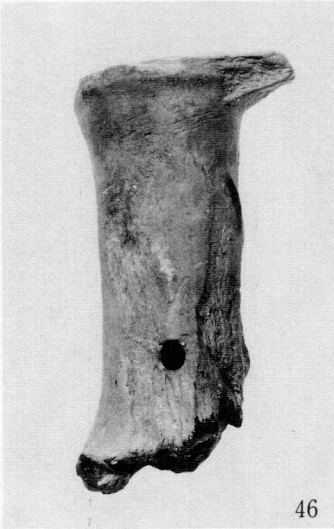
立会調査出土遺物 (2)

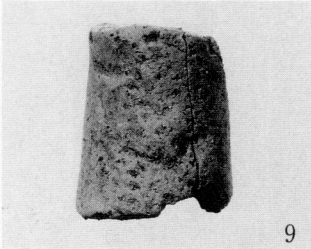


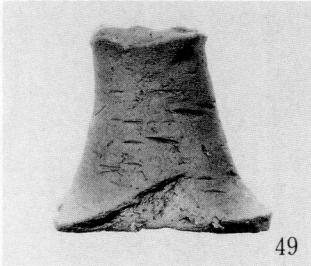
亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う立会調査出土遺物 (2)　約1：2

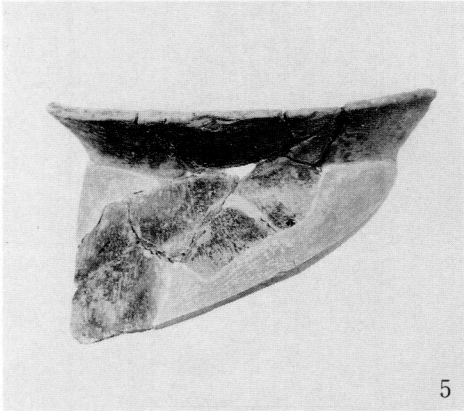
立会調査出土遺物 (3)


2

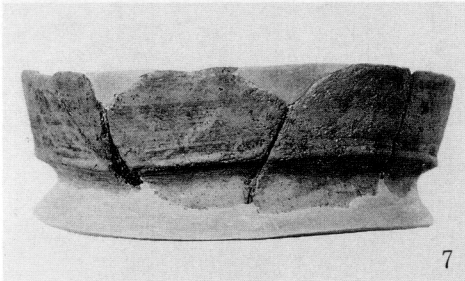

46

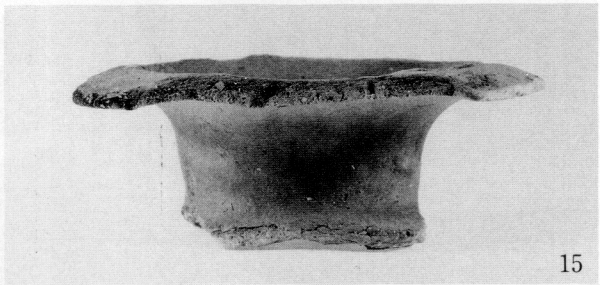

9


49


5

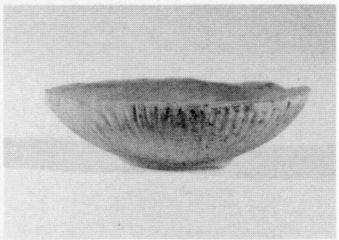
38


7


15

53

亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う立会調査出土遺物 (3)　　5・53…1：3，その他約1：2



人文・理学部7号職員宿舎公共下水道切替に伴う立会調査出土遺物　　約2：3